

地域日本語教育と人的ネットワーク構築 —子育て中の結婚移住女性を支援するために—

福村真紀子 (早稲田大学大学院生)

1. 研究の背景と目的

子どものことばの教育を考える際には親への視点も外せない。特に外国にルーツを持つ子育て中の結婚移住女性の多くは、子育ての疲労感に加えてことばの壁があり、社会との接触機会が少なく、「孤立」という問題を抱える。母親である結婚移住女性の孤立が、子どものことばの発達に深刻な影響を及ぼす事例報告(千葉他、2008)もある。彼女らが、子どものことばを含む成長を支えるには、自身の問題を乗り越える必要があるだろう。例えば、同じ境遇の人たちが集うコミュニティに参加し、子育ての問題に共に向き合い、人的ネットワークを築くことが一つの解決策となる。本研究では、発表者が地域日本語教育の一環として運営する親子参加型サークル(以下、サークル)の参加者である一人の結婚移住女性の参加理由を人的ネットワーク構築の観点から分析し、サークル外でも人的ネットワークを構築するための課題をあぶり出す。

2. 問題の所在と研究の意義

日本人と結婚して来日した、調査協力者のハナ(仮名)さんは、2人の子どもを育てている。サークルに継続的な参加をしており、サークル内では他の参加者と日本語を使って交流する。一方、サークル外では日本人の「ママ友」が作れずにいた。森・内海(2012)は、結婚移住女性が地域のネットワーク内の日本人と繋がるために、日本語の読み書き能力を養うための明示的で体系的な日本語教育を来日後早い段階で彼女らに施すべきとする。しかし、発表者は、明示的で体系的な日本語教育を第一に据えることよりも人的ネットワーク構築の手立てを講じることが先決だと考える。本間(2013)は、日本語習得よりも参加者との交流に重きを置く実践の事例を示し、日本語力を基準とした「中心」が作られない、ゆるい実践コミュニティへの参加が、日本語を使うことの自信に繋がることを示唆する。確かに、コミュニティ内での参加者同士の交流は孤立の脱却に繋がるが、コミュニティ外での人的ネットワーク構築への働きかけについても模索する必要がある。地域日本語教育に携わる発表者が、結婚移住女性が広い社会で自信を持って人的ネットワークを構築するための課題をあぶり出すことに、本研究の新規性を帯びた意義がある。

3. 分析方法

分析には、ハナさんがサークルに参加した時の活動記録と、彼女へのインタビューの文字化データを用いる。ハナさんには研究の目的と発表方法を説明し、調査内容の守秘や調査中止が可能である等の倫理的配慮について理解を得ている。分析方法は、佐藤(2008)の「定性的コーディング」を援用し、①人的ネットワーク構築に関わる部分をセグメント化する、②セグメントにその内容を縮約したコードを付ける(コーディング)、③似ているコードを集めてグループ化し、コード群の抽象化を経て概念的カテゴリーに置き換える、④概念的カテゴリー間の関係をふまえ、発表者の解釈を加えて再文脈化する、という方法で行う。各過程は何度も往還し確認を繰り返す。

4. 分析結果と考察

分析の結果、セグメントは24個抽出され、コーディングにより6個の概念的カテゴリーが生成された。紙幅の関係上、コードの詳細は発表時のポスター上に示すことにする。本稿では、以下に概念的カテゴリー（【 】内に記す）を再文脈化したものを示す。

ハナさんは、サークル外で、「ママ友」になりそうな日本人と日本語で話す機会があるが、おしゃべりを続けると、自分が日本人ではないことを相手に知られるという【「外国人」というアイデンティティから起こる不安】があり、会話が続かない。一方、サークルには手作りのお菓子を繰り返し持参し、【他の参加者への気遣いによる参加度の高まり】が見られた。また、活動では日本語の運用に問題はなく、【言語面及び活動内容面における十全的参加】が可能であり、サークル内では相手によって濃淡の差はあるが人的ネットワーク構築ができた。サークルで同じ境遇のピアを見つけ、サークル外でもそのピアとの互恵的な関係を作り、【ピアとの関係性構築】もできた。また、サークル主宰者（発表者）にピアとのトラブルについて語り、【自分とピアの問題の開示】という営みも見られた。その結果、主宰者との親密度が高まり、サークルでの呼称が姓から名に代わり、【主宰者との関係性の深化】という動きがあった。彼女のサークルへの継続的な参加の理由は、サークル外では日本語の自信のなさから人的ネットワーク構築が難しいが、サークル内では【自分なりの日本語が受容される安心と地域の人と出会って話せる喜び】が得られ、人的ネットワークが構築しやすいからだと考えられる。以下に考察を述べる。

サークルは定住外国人の散在地域に存在する。また、参加者の殆どは子育て中の女性である。よって、サークルは子育て中の移住女性が同じ境遇の人と出会える恰好の場と言える。多文化間精神医学の立場から、宮地（2005：334）は、文化をまたぐ移住者には「バラバラになりそうな自己をひきよせ、外と交通していくための力をとりもどす場所」が必要だと示唆する。ハナさんのような人的ネットワークを必要とする人には、サークルを宮地の言う「場」に近づける必要がある。そのために、参加者同士が多様な自己表現の方法を認め合える空気づくりが望まれる。また、他者と知恵を共有して個の問題を共に考え、解決しようとする営為である「対話」（フレイレ、2011）を、まずサークル内で起こすことが肝要である。彼女らが「対話」の力に自信をつけ、次に境遇が異なるサークル外の人とも「対話」を主体的に起こし人的ネットワークを構築していきけるスキャフォールディングが、大切な課題となる。地域日本語教育がこのような課題に向き合い、結婚移住女性を支援することで、子どものことばの成長も支えていくことができるのではないか。

【引用文献】

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社

千葉千恵美・渡辺俊之・平山宗宏（2008）「国際結婚の母子への子育て支援」『健康福祉研究』5

(1) 高崎健康福祉大学総合福祉研究所、pp.25-36

フレイレ、パウロ（2011）『被抑圧者の教育学（新訳）』三砂ちづる（訳） 亜紀書店

本間淳子（2013）「外国人の母親たちにとってのネットワーク活動の意義—十全的参加者として

のアイデンティティ形成プロセスに則して」『日本語教育』155 日本語教育学会、pp.159-174

宮地尚子（2005）「マイノリティのための精神医学」『トラウマの医療人類学』みすず書房、pp.326-347

森篤嗣・内海由美子（2012）「山形県における定住アジア人女性の日本語使用—首都圏・全国との比較から特性をみる」『国立国語研究所論集』国立国語研究所、pp.37-48